

氏 名(本 籍)	むら かつ たか お 村 上 隆 夫 (埼 玉 県)		
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)		
学 位 記 番 号	博 乙 第 1,203 号		
学位授与年月日	平成 8 年 7 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当		
審 査 研 究 科	哲 学 ・ 思 想 研 究 科		
学 位 論 文 題 目	模倣論序説		
主 査	筑波大学教授	文学博士	廣 川 洋 一
副 査	筑波大学教授		水 野 建 雄
副 査	筑波大学教授		河 上 正 秀
副 査	筑波大学教授	Dr. phil.	和 田 廣
副 査	筑波大学助教授	博士 (文学)	谷 川 多佳子

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、一般に「模倣」とよばれている現象を哲学的・倫理的に解明しようとしたものであり、その目的は大きくつぎの二点である。第一に、プラトン・アリストテレスに始まる芸術論的模倣論とG・タルドに始まる社会学的・心理学的な模倣論とを総合してひとつの包括的な模倣論を構築すること、第二に、ベンヤミンによって示された洞察を発展させて文明化と啓蒙の過程における模倣衝動の抑圧と制限について体系的な説明を与えることである。

本論文は、序文、序論、第1部「模倣と認識」(第1章～4章)、第2部「模倣と社会」(第5章～8章)から構成されている。

序文・序論において、著者は模倣論のための基本的な視点として独自の着想二点を提出する。第一に、模倣衝動の抑圧と制限は、外的な力の働きによるのではなく、模倣衝動自身の方向転換によっておこなわれること、模倣衝動の自己疎外によって理性が成立し、この理性によって模倣衝動が抑圧・制限されること。第二に、模倣論において問題なのは、人間の認識においても社会的行為においても、模倣衝動によって類似性がいかにもたらされるかということではなく、模倣衝動によって本来与えられていた類似性のほとんどがいかにして否定され消え去るかということである。

第1部「模倣と認識」を構成する第1章から4章にかけては、人間の魂が模倣的なふるまいを克服していく過程が、個人の認識の発達過程に即して跡づけられる。

第1章「感覚」では、人間の認識における最も受動的な基層としての感覚の受動作用が模倣衝動の最も基本的な働きであることが、ベンヤミンなどの説を援用して論じられる。

第2章「共通感覚」では、アリストテレスの共通感覚論などに拠りながら、感覚と記憶像によって本来的に形成される無限に豊かな類似性関係が、一定のものを残して剪定、除去されていく過程が論じられ、この剪定・除去を行うのが共通感覚にはかならないことが主張される。また、類似性形成が一定のものへと限定されることで、知覚、常識、習慣が成立してくることが論じられる。

第3章「判断力」では共通感覚の機能のうちで、とくに趣味と美にかかわるより高次の心的能力としての判断力が述べられ、それが本源的な模倣衝動に対してさらなる抑圧と制限を行うものであること、美的な快もまた感

覚の受動的模倣作用にともなう陶醉状態が抑圧され剪定されたものであること、そして、明確な比を模倣的な身体運動によって受容できるものだけが美的判断の対象とされることが論じられる。

第4章「理性」では、認識過程における模倣衝動の抑圧と制限の最終局面としての理性の形成が論じられる。感覚の光の差し込む穴を小さく絞り込んだ暗箱として魂を作り上げることで成立してくる理性、外界についての感覚から独立した閉鎖回路、他者を模倣することが禁じられ、自己自身だけをもっぱら模倣する自己模倣としての閉鎖回路（理性）の形成される過程が、プラトン、スピノザ、カント、M.メルロポンティなどを手がかりに跡づけられる。

第2部「模倣と社会」を構成する第5章から第8章にかけては、人間の魂が模倣的なふるまいを次第に克服していく過程が、社会形態の歴史的発展について跡づけられる。第2部の第5章から第8章にかけての論述は、第1部の第1章から第4章にかけての論述と各々密接に対応している。

第5章「群集」では、まず社会の基層をなす群集について、G.タルド、E.カネッティらの理論を援用して論じられる。次いで、この群集の性格を色濃く残した原始社会における諸個人の無差別の共産主義的な平等性と、没個性的な性格などが模倣衝動の抑圧の欠如として説明され、さらに原始社会の顕著な特徴である復讐の連鎖反応が模倣論の観点から論じられる。

第6章「共同体」では、模倣衝動が歴史的に抑圧されていく最初の過程が、禁忌（タブー）の形成、恥や憂鬱の感情の形成、社会内部の分業・身分・階級の形成過程として説明され、この観点から、プラトン・アリストテレスなどの伝統的な倫理学における徳論が論じられる。

第7章「市民社会」では、プラトンの劇場支配制の概念を手がかりに、模倣衝動の完全な抑圧にもとづく近代社会の体制が説明され、この下ではじめて成立する近代的人間像としての天才が模倣衝動との関連で論じられる。また道德感情が模倣論の観点から説明され、F.ハチスン、A.スミスの道德感情の倫理学が、劇場支配制の下での近代的な倫理学である所以が明らかにされる。

第8章「自由主義」では、全体の締めくくりとして、近代社会における政治的・経済的な行為原理としての自由主義が、さらに現代の倫理学と政治哲学の諸問題が模倣論の観点から批判的に検討される。ここでの著者の基本的主張は、第一に自由主義の前提する近代的人間なるものは模倣衝動の基礎を無視して構想されたものであること、第二にこの模倣衝動の働きを正しく評価することが、自由主義的前提にもとづく現代倫理学の難点を克服するのに役立つこと、の二点にある。この上に立って、模倣衝動の抑圧と制限を最も推し進めたところに成立する近代的人権と社会契約論、功利主義、カント倫理学が、他方でその根底においてなお根源的な、模倣衝動によって制約されていることが論じられ、またこの視点から功利主義の現代的形態としての厚生経済学、J.ロールズの正義論などが批判的に検討される。

審 査 の 結 果 の 要 旨

人間にとって最も根源的な衝動である模倣衝動がその全貌を明らかにするのは、それが抑圧、制限されていく過程においてである。この洞察はすでにベンヤミン、アドルノおよびホルクハイマーによって示唆され素描されてきた。本論文は、右の洞察をさらに根拠づけ展開することによって、従来の模倣論の二つの系列の総合化、すなわちより包括的な哲学的模倣論の構築を意図したものであり、そのようなものとして最初の意欲的な試みである。

包括的な模倣論の試みそれ自体がすでに斬新な知的営為というべきであるが、本書に提示された新しい知見として、（1）模倣衝動の抑圧と制限は、模倣衝動自身の方向転換によって行われること、すなわち、模倣衝動がその主体としての当の人間自身に向けられ、自己模倣という閉鎖回路が形成されることによって、反省的主体としての理性が成立すること、（2）アリストテレスによって最初に論じられた共通感覚の働きを模倣論の観点か

ら解明し、感覚と記憶像とのあいだにある根源的な類似関係を剪定することがこの働きの本質であること、(3) 芸術作用に狭く限定された模倣作用との関係を解明し、これを模倣衝動の抑圧と制限の過程のうちに位置づけたこと、(4) 近代イギリスの倫理学における道德感情の機能を模倣衝動の観点から解明し、これを、模倣衝動を完全に抑圧していかなる模範をも模倣しない近代的行為を社会的に制御する知的装置として意義づけたこと、(5) カント倫理学において道德法則に内在する天才概念を模倣論の観点から解明し、模倣衝動の完全な抑圧にもとづく近代的で独創的な行為も、それが社会的なものであるかぎり原理的にすべて模倣されうるという事実から、この道德法則の社会的機能を明らかにしたこと等があげられ、これらの注目すべき成果は、今後の模倣論研究にとって重要な寄与をなすものであると認められる。

しかし他面において、模倣を包括的・体系的に論ずるという意図に必然的に伴う、いくつかの問題点がないわけではない。第1部と第2部を一定の方法的意図に基づいて緊密な関連の下に叙述することは、本論文の体系性にとって最重要の点と考えられるが、このための配慮が十分な意味でなされているとはいえない。例えば、「市民社会」の特徴として模倣衝動の抑圧とともに新しい模倣衝動の成立が主張されるのに対して、これと対応する「理性」で述べられる自己模倣の論述には整合性に欠けるうらみがある。さらに、細部での解釈、用語使用に関しても、例えば共通感覚、ミュトス、魂・心についての統一的理解にやや正確を欠く点が認められる。これらを総合するとき、本書において提示された理論にはいまだ洗練の余地があると考えられる。

以上のような問題点はあるとはいえ、著者の斬新な視点と広範な学識に基づく本論文は、包括的模倣論の先導的試みとして十分に刺激的であり、今後この領域の研究者にとって必読の文献であることは疑いえない。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。